まちなか水めぐり

【水の道、いまむかし】

Ⓐ湧き水と井戸

長崎の水の歴史は、西山、立山あたりを中心に、古来より親しまれてきた湧き水から。西山神社の「椎木水」は、干ばつの時も枯れることなく、長崎奉行所にも引かれた名水。昭和57(1982)年の長崎大水害で水道が止まった時には、行列ができたそう。また、開港後は、あちこちに井戸が掘られました。桜町小学校の一角では、江戸時代の代官屋敷の井戸を見ることができます。

Ⓑ江戸時代の水道「倉田水樋」

しかし埋め立て地が多い町なので、水は質も量も不十分。そこへ、延宝元(1673)年、倉田次郎右衛門という町人が私財をなげうち、7年の歳月をかけて「水道」を敷設。カッパの伝説もある銭屋川などを水源に、丸太をくりぬいた「水道管(のちに板製も)」を使ったこの水道は、「倉田水」と呼ばれ、200 年以上に渡って人々の生活を支えたのです。

石崎融思「瓊浦華蘭進港図」
長崎歴史文化博物館収蔵

Ⓒ倉田水樋の恩恵はここにも「出島」

海に囲まれた人工の島・出島での生活にも水は必要でしたが、当初は水道もなく不便だったようです。しかし倉田水樋が完成すると、それは出島にも引かれました。医師ケンペルの記録にも「飲料水は竹の樋を設けて導いている」とあります。

Ⓓ日本初のダム式水道「本河内高部水源池」

明治期にコレラが流行すると、居留地からの強い要請もあり、倉田水樋に代わる新しい水道の整備が進められました。現在も水をたたえる「本河内高部水源池」は、日本の近代水道としては3番目、ダム式水道としては日本で初めて完成。明治 24(1891)年、長崎の町と居留地に水を送りはじめました。

Ⓔ水がシュワッと大変身「居留地」

水道が引かれた居留地では、生活用水として使うだけではなく、商品としての飲みものも作られました。日本で初めて大量生産されたサイダー工場の建物が、いまも残っています。

まちぶらプロジェクト

まちなか水めぐり

「まちなか水めぐり」は、平成26年度長崎市まちなか賑わいづくり活動支援補助金で製作しました。
Direction:長崎生活文化研究所 トンビ軒／Design:Y.S.studio

【暮らしの中の水の風景】

ぽとり、ザーザー、ごくごく、バシャバシャ…いつも、だれにでも、
とってもたいせつなもの。「水」をたずねて「まちなか」を歩いてみれば、
古いもの、新しいもの、人の暮らしの息づかい…
いろんなものがつながり、浮かび上がってくるようです。

❶トッポ水

弘法大師が「独鈷（どっこ）」で掘り当てたという泉。江戸時代には、長崎の港に入った船が、飲み水として積み込んだそう。これを「雌川」とし、近くの「雄川」と合わせて「夫婦川」となりました。

❷水神社とカッパ

現在の阿弥陀橋付近には「銭座」があったので、別名「銭屋川」。江戸時代の水道「倉田水樋」の水源となるくらい豊かな川でしたので、すぐ下流には、紙屋や紺屋といった水を必要とする職人町がありました。水神社も祀られ、代々の神主は「カッパ使い」だったという伝説も。

❸もやし屋の井戸

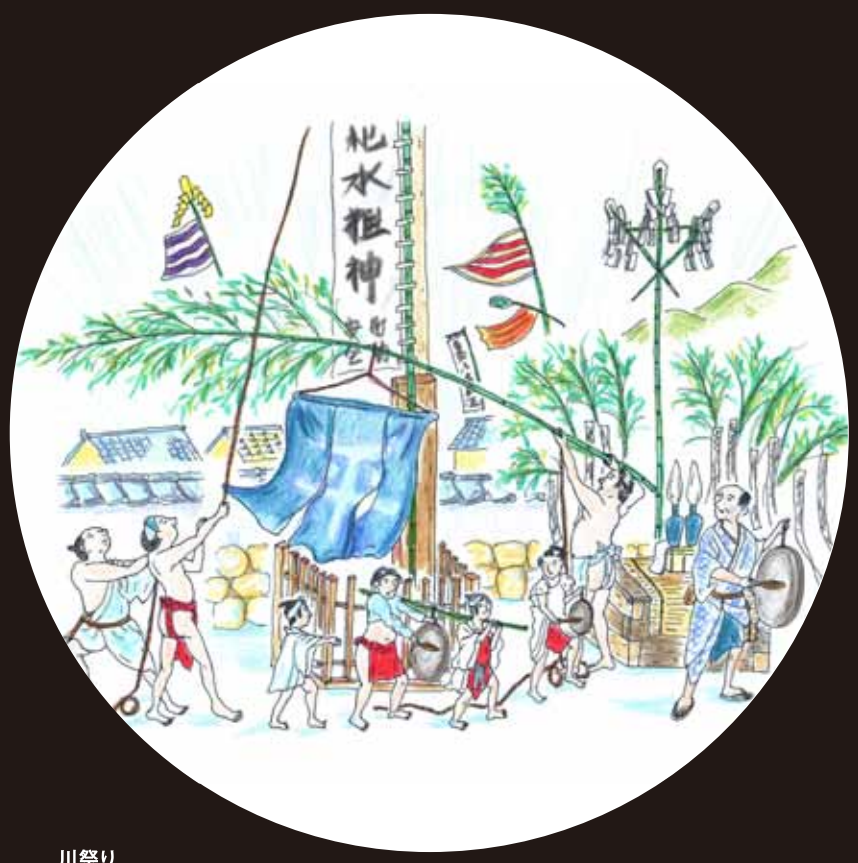
おなじみの「もやし」は、なんと長崎名物でした。その生産には多くの水が必要で、伊勢町の川沿いに「もやし屋」さんが並んでいたそうです。川をよく見ると、水が湧いています。

❺地獄川

江戸時代に牢屋だったところの下を流れているので、こんな物騒な名前が付いてしまいました。小さな流れをよく見てみると、明治期にできたレンガのアーチや石張りが残っています。

❻ししとき川

溝より大きく、川より小さい用水路を、長崎では「えご」と呼びました。生活に欠かせない井戸とあわせ、井戸端や「『えご』ばた」は、人々が集まり、子どもたちが遊ぶ場所でした。その代表格が、江戸時代初期、寺町の下の通りに作られた「ししとき川」です。諏訪神社に奉納する鹿（しし）に縁があるともされています。明治に入ると、コレラ対策として石畳が敷かれました。



川祭り

暑い季節、江戸時代から昭和の初めごろまでは、川祭りが盛んに行われていました。ひとくちに「川」といっても、海のそばの町は、波打ちぎわで。川があれば、もちろん川で。あるいは「井川」と呼ばれた井戸にも、旗や幟を立て、お供えものをして、水への感謝を込めたお祭りをしたのです。

❼アーケードの足下

普段は多くの人で賑わう観光通りですが、じつはその下に、大きな暗渠があります。長崎大水害の時には、一夜にして地面が突き破られ、かつては両岸に柳が揺れていたという川が現れました。

❽暗渠がひと休み

浜の町の路地裏を歩いていると、ししとき川が銅座方面へつながる暗渠が「ひと休み」して、水の流れが顔をのぞかせています。

❾水害の記憶

昭和57（1982）年7月23日に起こった長崎大水害では、まちなかエリアも大きな被害を受けました。思案橋そばの「長崎大水害記念塔」には、157cmという氾濫水位が記されています。

❿どんどん坂

洋館やレンガの壁が連なる、居留地時代の風情が残る坂。「どんどん」は、雨水を効率よく排するための三角溝や四角溝を、「どんどん」水が流れ落ちていく様子を表しています。

街角の水神さま

いつもの通りの街角や足下にふと目をやると、井戸や水の神さまが、いまも大切におまつりされています。中通りや浜の町でも見つけることができますよ。

❹飴屋の幽霊井戸

六夜続けて一文の飴を買いに来る女。七夜目にはお金が無いと言う。飴を渡して跡を追うと、お墓の中に赤ん坊！伊良林の光源寺にその像が伝わる「産女の幽霊」が、飴のお礼に教えてくれたというのが、麹屋町の「幽霊井戸」のいわれです。